

柝の音

放送で「柝の音」のことを「キノオト」と言っていたが、「キノネ」が正しいのではないが、という問い合わせを受けた。

歌舞伎や相撲などで使われる「拍子木」を「柝」と言い、これをたたくときに出る「おと」のことを「柝の音」と言う。

「柝」は、現代ではあまり使われなくなったが、冬場に「火の用心」と呼びかけながらたたく2本の木の棒と同じ物だ。歌舞伎では、幕の開け閉めのときに「柝」が打たれる。相撲では、力士の土俵入りのときや、1日の最後の取り組みの前に「呼び出し」と呼ばれる人たちが「柝」を打つ。どちらも、「チョンチョン」という感じの軽く高い音だ。

さて、「柝の音」ということば。歌舞伎では「キノオト」と読むのが一般的だ。宮尾登美子の小説『きのね』には「歌舞伎ではキノネとは言わず、キノオトと言うものだ」と書かれている。この小説では、歌舞伎の世界を知らない主人公を表現するためにわざと「キノネ」という言い方が使われている。

おそらく、歌舞伎に限らず、相撲も伝統的には「キノオト」なのだろう。国語辞典には「柝の音」の立項はないが、「音(ね)」という項目に、「おと。こえ。小さく美しい感じのものに使う」(『新選国語辞典第9版』小学館・2011)とある。歌舞伎も相撲も何かをするときの「合図」として「柝の音」が使われている。「合図」だから大きく響く音でなければ

いけないし、美しい音を味わうものでもない。そのため、伝統的には「キノオト」なのだろう。

ところが、相撲の中継で「キノネ」と言っているのを聞いた。相撲中継を担当するアナウンサーの間では、「キノネ」という言い方が受け継がれているという。

「音(ね)」の語釈には次のようなものもある。「物の発する快い響き」(『大辞林第3版』三省堂・2006)。相撲では、「柝の音」が「合図」から離れて、特別な「音色」のようになっているのだろうか。それは個人的な感覚にも合致する。土俵入りのときに、東の柝の音と西の柝の音が重なって聞こえる部分がある。東と西で少し音の高低があり、「柝の音」のハーモニーになる。それは快い音で、まさに「ネ」と言えそうだ。

実は、相撲だけでなく、歌舞伎でも「キノネ」という言い方を聞くことがある。歌舞伎の「柝の音」も三味線や鼓のように音色を楽しむものに変化してきているということなのだろう。小説『きのね』の主人公も「柝の音」のことを「素晴らしい音色」だから「キノネ」と言いたくなると言っている。相撲と同じで、これも私の個人的感覚にしっかりと合う。「キノネ」「キノオト」、どちらが正しいとは言えなくなってきているのだろう。そのうち、「火の用心の“ネ”が聞こえる」という表現を聞く日がくるのかもしれない。

山下洋子(やました ようこ)